
怪話篇 第十二話 老人の家

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪話篇 第十二話 老人の家

【Nコード】

N8458T

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

その家は一見何ののないものだった。ただ、住む住人が頻繁に入れ換わる以外は。若い夫婦が入り、いつのまにか老夫婦が入ったかと思うと、すぐにまた若者が引っ越してくる。その家にはいったい何が起こってるのか：

1

「角の処の家、新しい人が引越して来たんですって？」

「ええ、そうなんですよ。前に住んでいたお爺さん達が引き払ってすぐに。」

「道理で、奇麗になつてるはずだわ。住む人達が若返ると、家まで若返つたみたいに見えるわねえ。」

「まったくねえ。でも、前に住んでた岡田さん、何の挨拶もなしに出てっちゃうなんてねえ。近頃の若い者は、なんて言わせておけないわねえ。」

「全くその通りよ。今度来た北岡さんなんか、夫婦揃つて御挨拶に来たのよ。」

「意外と礼儀正しいのねえ。わたしなんか、ほおりっぱなしだったけど。」

「普通そうじゃない。家の団地だつて、すぐ隣なのに、挨拶なしなんですからね。」

「あらあ、それはちよつと礼儀知らずじゃなあい？」

「ほんつと、最近の人達つたらないわねえ。」

「だけど、羨ましいわねえ。今時庭付のお家なんて。家の亭主なんか、定年まで扱き使われてさえ、一個建てなんか購つてもらえそうもないもの。」

「あらあ、それは家だつておんなじよ。その癖、自分は一生懸命に働いてるんだぞつていう自己主張だけはしてるんだから。せめてもうちよい稼いでもらわないとねえ。」

「あら、もうこんな時間。奥さん、早くしないと。」

「そうそう、ダンス教室の先生つて、素敵だけど時間に厳しいから。」

「家の亭主ほどじゃないけどね。ちょっと朝が遅いと、もう、うるさいうるさい。」

「そうそう、家も。その癖、自分は午前様でしょう。」

「ほらほら。無駄口言っていないで急がなくちゃ。」

2

「ねえねえ、奥さん。角のお家、未だ一年ちよいなのに、もう入れ替わっちゃったの、知ってます？」

「でも、表札は変わってなかったわよ。」

「ああ、あたし知ってるわよ。今度は、お翁ちゃん達でしょう。エアロビスクの帰りに、見たわよ。」

「もう、近頃珍しく礼儀正しい人達だったと思ったのにねえ。」

「そうそう。何の挨拶もなしに、出ていっちゃうなんて失礼ねえ。」

「でも、夜逃げじゃああるまいし、いつの間に出てったのかしらねえ。」

「本当。あのお爺ちゃん達も何か付き合い悪そうだしねえ。」

「ねえ、奥さん。今度入った方、どおいう方だか知ってます？」

「あら、田中さんの奥さん知ってらっしゃるの？」

「いゝえ。前田さんこそ、知ってらっしゃるものとはっかり。」

「あら、変ねえ。今度、主人に訊いてもらうように言ってみましようか？」

「そうそう、三田村さんのご主人は不動産関係の方でしたものねえ。」

「やっぱり、変な方達だとねえ、気味が悪いから。」

「子供達にも、教育上良くありませんものねえ。」

「あらあら、もうこんな時間。ごめんなさい、ちょっと予約があったて、もう行かなきゃならないの。」

「あら、あたしも。明日は、参観日ですものねえ。」

「そうそう、クリーニングもう届いてるかしら。ごめんなさいねえ。」

「でも、変ねえ。あのお婆ちゃん、見た事ある気がするのよねえ。」

3

「角の処の家、新しい人が引越して来たんですって？」

「ええ、そうなんですよ。前に住んでいたお爺さん達がいなくなつたと思つたら、もうすぐに。」

「道理で、奇麗になつてはるはずだわ。住む人達が若返ると家まで若返つたみたいねえ。」

「まつたく。でも、いつ引越して行つたのかしら。奥さん、知ってます？」

「いいええ。」

「でも、普通そんなもんじゃなあい。家の団地だつて、すぐ隣なのに、挨拶なしなんですからね。」

「あらあ、それはちよつと礼儀知らずじゃないの？」

「ほんつと、最近の人達つたらねえ。」

「だけど、羨ましいいわねえ。この御時世に庭付のお家なんて。家の亭主なんか、定年まで扱き使われてさえ、一個建てなんか購つてもええそうもないもの。たとえローンにして貰つてもよ、ローンに。」

「あらあ、それは家だつて。その癖、自分は一生懸命に働いてるんだぞつて、いう自己主張だけはしてるんだから。せめて、もうちょい稼いでもらわないとねえ。」

「今度の人達も、付き合い悪そうねえ。まあ、町内会の分担の仕事さえ、しっかりやってくれれば、別に構わないけど。」

「あらあ、そう言う奥さんのところが、一番さぼってるんじゃないかい？」

「まあ、失礼な。家はちゃんと主人に出てもらってますよ！」

「そうそう、そうでしたよねえ。でもあんまりご主人苛めちゃ駄目よ。もう、来年で四十過ぎるんだから。」

「家の亭主だつて、もう大分擦り切れちゃってるもんねえ。あのお

家の住人みたいに、すぐ替え効くと、ありがたいんだけどね。」
「全くその通りねえ。」

4

「はい、こちら 不動産でございます。はい、少々お待ち下さい。
社長、大地さんからお電話です。」

「判った。はい、武田です。」

私だ。判るか……

「……何の……御用で。」

「……そろそろ、新しいモノが欲しい。頼むぞ……」

「はあ……。仕方ありませんなあ。」

「……いやか……」

「いえ！滅相もない。ですが、……まあ、何とかしましょう。」

すまぬな……

「私は、構いませぬが、周りの住人が気味悪がりませんか？
？」

ふむ、……。いや、お主は余計な心配はせずともよい……

「はつ。では、手配しておきます。」

……。待て。

「はあ？」

この前のような、紛いモノにて間に合わすのは止めよ……

「あれは、……。あんなモノが、存在しているなんて知らなかつ
たんですよ。」

……。判った。だが今度はしくじるな……

「……」

あんなモノでは、我が飢えは充たせぬ。若さがない……。お
主の祖父が、太古よりの約束を違えた時の事を、忘れた訳ではな
かろう。九頭竜大神の力をみくびるな。あのような強大な力を封ずる
結界を維持するには、もっと若さが要る……

「承知しました。では、とり急ぎ。」

頼むぞ……

5

「角の処の家、また新しい人が引つ越して来たんですってえ？」

「そうみたいねえ。前に住んでいた、お爺さん達が、いつの間にか引き払ったと思ったらもう、すぐに。」

「道理で、奇麗になつてはるはずだわ。住む人達が若返ると家まで若返つたみたいねえ。」

「まったくねえ。でも、いつ直したのかしら。奥さん、知ってます？」

「いいええ。」

「不思議ねえ。でも、これだけのお家なんだから、手放すなんて勿体ない話ねえ。」

「ほんつと。家の亭主なんか、定年まで扱き使われてさえ、一個建てなんか絶対に購ってもらえそうもないもの。たとえローンにして貰つてもよ、ローンに。」

「ああ、それは家だつて。その癖、自分は一生懸命に働いてるんだぞつて、いう自己主張だけはしてるんだから。せめて、もうちょい稼いでもらわないとねえ。」

「今度の人達も、付き合い悪そうねえ。最近の若い人達つて、皆こうなのかしら。」

「こんなもんよお。家の長男だつて、愛想ないない。その癖、一人前に、もう、彼女なんか作つて。全く誰に似たのか。」

「彼女ねえ……まあ、知らない間に子供作るよりましじゃなあい。」

「ちよつと、物騒な事言わないでよ。心配してるんだから。」

「ごめん、冗談よ。でも、あんなお家欲しいわねえ。」

「あたしはいいわ。あの家つて、何か気味悪くつて。越して来た人は随分見たのに、出て行くのは一度も見えてないもの。」

「あら、すぐお隣なのに？それはちよつと不気味ねえ。」

「きつと、夜逃げでもしたのよ。あれだけ大きいと、税金も結構かかるんじゃない。」

「うーん、あこがれちゃうなあ。」

「そうかなあ。あたしは、ちよっと気味悪いなあ……。」

e o f .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8458t/>

怪話篇 第十二話 老人の家

2011年10月9日03時54分発行